

水^{みな}
面^{なも}

柴田康弘

時雨^{しぐれ}が通り過ぎ

森^{もり}がけぶり

紅葉^{もみじ}の色彩がいつそう鮮やかになる

波紋^{なみだ}が消えるように

うすれていく記憶は

どこかで

わくらの葉にうずもれて

伝えるべき言葉が

金木犀の香りに紛れて

思い出せない

後ずさりする自分

その差異の丘から

吹いてくる風

だれもが

一匹の山女魚を

胸の溪流に潜ませ

閃光が一瞬、暗闇を引き裂き

しばらくして水面に

秋の雷鳴がとどろきわたっていく